

ほろ苦にがき 湯気ゆげの向こうの 笑窪えくぼ顔
午後ごごに陽ひかりの差さす 秋あきの想おもひ出で

令和四年二月十七日

大中臣正比呂



「アルハンブラ宮殿の想い出」を聞きながら、久しぶりに珈琲を入れた。恋は苦くても、甘くても美しい。それを計る手立ては音楽か、日のひかりか、はたまた季節の妙動か。